

## 寮歌について (97・1・16)

雑 喉 潤 (昭24・文甲一修)

### 〈琵琶湖周航の歌〉

「日本寮歌大全」という本が、ちかごろ国書刊行会から出ました。そのなかに歌手・加藤登紀子のはなしが載っています。彼女がイランの首都テヘランに行ったとき、英国人たちのパーティーに出席して、「琵琶湖周航の歌」のドーナツ盤を披露すると、英国の既婚女性が非常に感激して

「わたしの国の歌を聴かせて下さってありがとうございます」

といわれたそうです。加藤さんは

「たぶんイギリスにあった学生歌の伝統が、当時の日本の学生のなかに流れ込んでいて、記憶がはっきりしないまま、そのメロディーがどこかにあつて〈琵琶湖周航〉になったのではないかと思えます」

といっています。これは海堀さんが発表された「琵琶湖周航」の曲は、吉田千秋の「ひつじぐさ」だが、さらに前に英国童謡「ウォーター リリー」があったという説を裏付けるものです。しかし海堀さんは「ウォーター リリー」は輸入されなかったとおっしゃっています。非公式に入ってきて、吉田千秋さんはそれを無意識に記憶しておられて、あのメロデーとなったのではないかとわたくしは思うのであります。あのハイカラなメロデーが、滝廉太郎が没してわずか十数年の日本人に作曲できたとは、とうてい思えないのです。

### へ七里ヶ浜の哀歌

無意識であるか、意識があつてのことか、明治・大正の歌には、歌詞は自前、曲は欧米の借り物という例が非常に多く、その顕著な例は「七里ヶ浜哀歌」であります。明治四十三年（一九一〇）一月二十三日、逗子の開成中学の生徒十二人がボートで遭難し、その大法要が二月六日にいとなまれました。そのとき、近くの鎌倉女学校の生徒が弔問に来て歌ったのが「真白き富士の根 緑の江の島」で始まる「七里ヶ浜哀歌」でした。

大正五年に出た楽譜では、三角錫子作詞・ガードン作曲となっています。これは鎌倉女学校の音楽の先生だった三角錫子さんが急いで作詞したものの、作曲が間に合わず、また当時の日本で、西洋風の音楽を作曲できる人をさがすのが困難だったので、ガードンの

「夢の外」という曲を借用したのです。なにもガードンが七里ヶ浜の遭難を哀れんで作曲したのではないのです。

明治のころは、歌詞はどんどんできてゆくものの、歌詞にのせるメロディー、つまり節は、同じものをしばしば使いました。たとえば明治十九年（一八八六）紀州沖で英国船ノルマントン号が沈没したとき、日本人客だけが救助されず、見殺しにされたため、国内では憤慨のあまり「ノルマントン号沈没の歌」ができました。

これはニュースを文語体でそのままつづったような歌ですが、それを前年にフランス人ルルーが「抜刀隊の歌」のために作曲したメロディーによって歌いました。このメロディーは日本人の心情によくマッチしたものと見え、次第に歌いくずされたものの「ラッパ節」や戦後の「お座敷小唄」に至るまで、痕跡をとどめています。

「アムール河」という一高の寮歌は、明治三十四年にできましたが、メロディーは陸軍を賛えた「歩兵の本領」といっしょです。一高側は作曲は栗林宇一だといひ、「歩兵の本領」の方は、音楽評論家の堀内敬三が永井建子説けんしをとり、これは本人に確認したと書き残しています。

従って現在は二説が併用されていますが、このメロディーは大正十一年（一九二二）のメーデーから歌われた「メーデーの歌」にも採用されています。同じメロディーがエリー

トの卵と陸軍兵士と労働者というまったく異質の集団によって歌われたのは、非常に日本的な現象であると思います。

旧制中学校の応援歌ともなれば、これは寮歌・軍歌のメロディーを拝借したものがほとんどで、神戸一中・二中の対抗試合で、二中が常に高唱する応援歌は「勇敢なる水兵」のメロディーの借用版でした。

日本で作詞・作曲が一体化し、たとえば野口雨情作詞・中山晋平作曲「証城寺の狸ば子」という風に明記され、著作権が確立され始めるのは、大正から昭和にかけてでありまして、「琵琶湖周航の歌」に関しては、海堀説はおおいに尊重されるべきではありませんが、ひよっとしたら加藤登紀子説の方が正しい、ということもあり得ると思います。

昭和十六年（一九四一）に四高のボートが琵琶湖で遭難したとき、日本は歌謡曲の隆盛時代に入っていましたから、奥野椰子やし夫お作詞・菊池博作曲の「琵琶湖哀歌」ができました。琵琶湖汽船のマリンガールは、これと「琵琶湖周航の歌」は必ずおぼえて歌えるように訓練されました。いまは知りませんが――。

「ウォーター リリー —— 琵琶湖周航説」があるものの、七里ヶ浜・琵琶湖周航・琵琶湖哀歌と、水とボートにちなむ明治・大正・昭和の三つの歌をあらためて聴きますと、三つがなんとなく似ているのは、はなはだ注目すべき現象のように思います。

## へ紅もゆるについで

わが三高の「紅もゆる」も、一高の「嗚呼玉杯に花受けて」も、ともに明治三十年代にできましたが、最初は勇壮活発でテンポの早い行進曲調で歌われました。西洋音楽を文部省より十数年早く摂取したのは、陸海軍軍楽隊ですから、その影響で、軍歌調の行進曲風に作曲されたのは自然の勢いでした。いまでいえば、長調・四分の二拍子の小学校の唱歌みたいに歌われるのを予想したような曲でした。

少し専門的にいうならば、いわゆるヨナ抜き長音階といって、ファとシの半音のない、一オクターブ五音階の曲でした。しかしこれではさっぱり面白くありません。肩を組みながらゆっくり歌うために、いつか四分の四拍子に変化しました。さらに「くれない」の「な」と「おかのはな」の「は」のところ、これはハ長調では「ミ」と「ラ」に当たりませんが、この「ミ」と「ラ」を半音下げて歌いました。そうすると、自分たちの情緒によく合うように思えたのです。

期せずして、これは江戸時代から日本人が親しんできた都節音階と、ほぼ同じものになったのです。卑近な例として、小唄の「よりをもどして」を挙げます。「よりをもどして会う気はないか 未練でいうのじゃなけれども 鳥も枯れ木に二度とまる チト会いたいね」——寮歌とはまったく世界が違う卑俗な歌ですが、この「未練でいうのじゃなけれど

も」のところのメロデーが「さみどり匂う岸の色」のところに、非常によく似ているのです。このようにエリートの集团的自己確認のあかしとして歌おうとすればするほど、日本人の心に江戸時代以来、巣くっている都節音階に接近していったというのは、これもはなはだ興味があるところであります。

#### へ嗚呼玉杯とアムール河について

一高の「嗚呼玉杯」は難解な歌であります。玉杯に花を浮かべ、緑酒に月の影を宿して得意の状況を賛美しているのかとおもえば、実はそれはいけないので、そういう栄華の巷を低く見て、我らは向丘むこうがおかにそそり立っているのだ、と一節の歌詞のなかで、価値が反転しています。「紅もゆる」の方がはるかに素直であります。

しかし時代を経るに従って、「玉杯」は否定されるべきものでなく、むしろ肯定されるべきものようになってきました。佐藤紅緑こうろくの少年小説「嗚呼玉杯に花受けて」は、そういう風に理解されるべき小説です。ちなみに「熱海の海岸散歩する」という、有名な「金色夜叉」の歌は、宮嶋都芳と後藤紫雲の作詞・作曲ですが、「嗚呼玉杯」の変型といわれています。「金色夜叉」の主人公、間貫一はざまは一高生ですから、これは天才的な着想かも知れません。

「アムール河」は、帝政ロシアが東方に勢力を伸ばし、黒竜江の岸で清国人を大量に虐

殺したことに對して警鐘を發した歌ですが、「満清すでに力尽き 末は魯縞も穿ち得で」というむつかしい個所があります。満州族が中国に建国した清国も、いまや衰えてへ口になつていゝという意味ですが、この「魯縞」のたとへは、漢の劉向の「新序」という本のなかの「強弩の末、魯縞に入る能わず」という文章を典故としてふまえています。このように典故を駆使し、博識を共有しようというのが、寮歌のいちじるしい特徴の一つといえます。

「日本寮歌大全」のなかで、高知高出身の安光公太郎氏が、寮歌は万葉集であるという説に反對して

「寮歌は万葉集ではなく、唐詩選のようなものである。万葉集には天皇から遊女・奴婢・乞食に至る、あらゆる階層の人々の歌が収められているが、唐詩選の詩人は士大夫階級、つまりエリート層に限られている」

という趣旨のことを述べられているのは卓見だと思ひます。旧制高校生は、同年輩の青年のわずか二百五十分の一、千人のうち四人に過ぎなかつたです。

#### へその後の寮歌の流れ

これまでに寮歌の二大特徴として、行進曲をじぶんたちの共同体にふさわしい歌にするために、都節に近い風に歌い崩したこと、歌詞に典故や難解な漢語を駆使して、高い教養

の共有を誇示したことを挙げました。

しかし一から八までの番号のついた、いわゆるナンバー・スクールにつづいて、全国主要都市に計三十八も高校が出来、その結果、寮歌の数も二千曲以上にふえました。それにつれて、「嗚呼王杯」など初期の寮歌が持っていた理想主義は、次第にロマンティシズム、ひいてはリリシズムに変容してゆきます。

これは行進曲調を歌いにくくした寮歌の主調が、浅草オペラとか歌謡曲の流行などの影響を、多かれ少かれ受けたということもあるでしょう。しかし寮歌全体としては、優秀なものには「都ぞ弥生の」の北大寮歌、「北の都に秋たけて」の四高寮歌などごくわずかで、多くは「千篇一律」というところではないかと思えます。

しかし東京六大学応援歌とは、おのずと違った、一種の格調をもって歌われたことは事実であります。六大学の応援歌をレコードなどで聴きますと、音程が悪く、音楽性もありません。それをまぎらすための、こけおどしのかげ声、から元気が感じられ、太鼓の音に主導され、自由に歌いながらおのずと規律がある、寮歌とは別物という感じがいたします。

加藤登紀子は、寮歌を熱心に歌っていますが、スタッカートを利用させた、現代風の歌い方には、違和感を禁じ得ません。「琵琶湖周航の歌」なら、都はるみの方が、まだしも寮歌風です。都はるみさんに会ったとき、そのことをいいますと「いやあ、三高のお兄さん

にほめてもらおうとうれしいわ」といっていました。

### 〈寮歌風の消滅〉

「日本寮歌大全」を見ますと、旧制高校の復活は、何度となく陳情されましたが、昭和四十年代に絶望となりました。文部省の方針が、少数エリート養成から、最大多数の最高学歴へと、はっきり変わったからであります。これは戦後の「駅弁大学」の追認であります。もつともこの中から東大優越の受験地獄が生み出されたわけで、最大多数の最高学歴など、しよせん虚構であることを示しているかのようです。

もつとも少数エリート育成は、中国をはじめ東アジアの国々が熱心に推進しており、この点では、旧制高校的なものは、これらの国々で再現されているかのようであります。旧制高校的なものを抹殺してしまった日本は、二十一世紀にどうなるのか、はなはだ心配なことなのです。

一世紀近く歌い継がれてきた寮歌が、こういう世相の下では、旧制高校体験者の最後の一人が死に絶えると、日本から消え失せる、それが近い未来であると思うのはさびしいことです。記念館ができて、それは死に体です。

### 〈後世に残る寮歌〉

それでは寮歌にまったく明日はないのか。わたくしは、ごく少しのものは残ると思いま

す。その第一は「琵琶湖周航の歌」です。この歌を最近の若者は、寮歌であると意識しないで、歌謡曲のスタンダードナンバーのように思って、カラオケで歌っております。とくにハイカラなワルツ調によつて、旅する心が歌われている点が、受けています。二十一世紀には、日本人の「世界周航の歌」に変容するかも知れません。

次に「北帰行」です。これは正式の寮歌ではありません。わずか五年の歴史しかなかった旅順高校を、女性問題で退学になった宇田博という人の、万感あふれる訣別の歌です。寮歌を忠臣蔵としますと、四谷怪談の民谷伊右衛門の関係になります。この歌は昭和三十年代に歌声喫茶で復活してから、根強い愛唱者を持っています。二十一世紀にも、時に挫折に陥った日本人を慰める歌となるでしょう。

もうひとつ挙げるなら、「都ぞ弥生」の北大寮歌で、これは合唱曲に編曲してもらいたいへん美しいという強味を持っています。

日本武尊を葬った御陵から、一羽の白鳥が飛び立って、大海原を越えたといわれます。旧制高校のファイアストームの残り火のなから、飛び立とうとしている三つの歌の前途に、幸多かれとわれわれは折りたいと思います。ご静聴ありがとうございました。

(名古屋自由学院短期大学教授)